

公立小学校でESD（持続発展教育）の実践をはじめするには
 —地域との連携による「まちづくり」のカリキュラム開発を通して—

所属校：葛飾区立小松南小学校
 氏名：小林 祐一
 派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：ESD・持続発展教育・カリキュラム開発・まちづくり・開発教育

I 研究の目的

ESD (Education for Sustainable Development) は、「持続可能な開発のための教育」「持続可能な社会をつくるための教育」「持続発展教育」等と訳されている。今から8年前、日本政府と日本のNGOが「国連ESDの10年」を提案したことが、世界的にESDを普及させるきっかけとなった。ESDでは、児童に「思考力」「情報活用能力」「コミュニケーション能力」を身に付けさせながら、「人間の尊重」「多様性の尊重」「環境の尊重」という価値観を培い、市民として参加する人間の育成が目指されている。これは、「生きる力」に通じるものであり、現代的な教育課題といえよう。

しかし、日本の学校現場におけるESDの認知度は、まだまだ低いと言わざるを得ない。そこで本研究は、「どうすれば、ESDを実践できるのか」「どうすれば、ESDを根付かせることができるか」を研究設問にして実践研究を行った。そして、この問いに向かうために、「特別ではない学校」を調査対象とした。ESDを実践する過程には、様々な障壁が生じることが想定される。一つの学校の事例ではあるが、その過程で、どのような問題が生じ、どうすれば解決できるのかを考察することで、ESDを広く普及させるための手立てを見出したい。

II 研究の方法

筆者は、週に1、2回、学校勤務者としてA校（都内公立小学校）にかかわり、アクション・リサーチを行った。そこでは、ESDに関連した授業を開発・担当したり、学校運営の助言者として会議等に参加したりした。学級担任や校務分掌はもたないが、研究主題に迫るための積極的な関与を行い、学校や児童・教職員・保護者・地域の変容を追究し、記録・分析することで、仮説生成への手掛かりとした。

III 研究の結果

1 ESDカリキュラムを開発するための方法

本研究では、「まちづくり」をテーマに、ESDカリキュラムを開発した。ESDを実践するにあたり、小学校の発達段階では、児童に身近な素材からカリキュラムを開発することが効果的だと考えたためである。

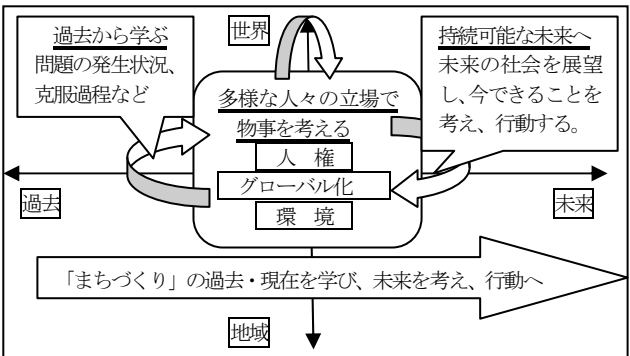
(1) ESD単元の4つのモデル

ESDを実践する場合、以下の4通りが考えられる。a～cが積み重なり、dとして学校・地域に根付くことを期待した。なお、本研究では、a b cの類型それぞれに授業実践を行った。

ESDを実践する際に考えられる4つの類型	
a 総合的な学習の時間 (ESDへの修正)	…実践①
b 新しい単元の開発 (地域の実態を考慮)	…実践②
c 教科書+α (「発展」として構成)	…実践③
d 特色ある教育活動 (学校の特色として定着)	…期待する姿

(2) ESD単元開発のための4象限図

ESDの単元を開発するための視点を「時間・空間」の軸で図式化した。これにより、ESDの理念である「多様性」「持続可能性」を意識して単元開発することができるようにした。



(3) PLAⁱ (Participatory Learning and Action: 参加型学習行動法) の活用

PLAとは、学習者が社会へ主体的にかかわる学習法であり、地域開発の手法である。本研究では、この手法を「まちづくり」の単元開発に活用した。a～fを用いたことにより、効果的に取材・教材研究をすることができた。また、授業に取り入れることで、児童の学習にも役立てることができた

PLAの手立て	単元開発における活用
a 地域マップづくり	: 地域の課題把握・地域資源の発見
b 社会関係図	: 課題の構造を図式化
c 参加のはしご	: 参加の価値づけ・行動化の省察
d 人物カード	: 取材メモ・新たな人脈の構築
e 地域課題ランキング	: 地域課題への省察・葛藤の創出

2 授業実践

(1) 「わがまちプロジェクト」…実践①

<6年・総合的な学習の時間・まちづくり>

ねらい：私たちの住むまちのよさを探し、これまでのあゆみを学び、これからのまちづくりを考える。

- 学習のながれ**：①フィールドワーク(課題を見つける)
②調べる(まちのなりたち・地域の方にインタビュー)
③考える(ワークショップ・課題解決の方法を考える)
④まとめる(プレゼンテーションソフトの活用)
⑤発表・意見交換する(学校公開ワークショップ)
⑥行動する(地域まつりへの参加・未来のまち展示)

E S Dの視点からの省察

- ・まちづくり協議会との連携により、学校との継続した取り組みやまちづくりへの参画が実現した。
- ・学習課題の設定や課題追求の場面から、児童の生活経験や学びの履歴とのつながりが見られた。
- ・児童の意識に「地域への誇りや愛着」「社会参加への意欲」が見られるようになった。

(2) 「世界となかよしプロジェクト」…実践②

<4年・総合的な学習の時間・多文化共生>

ねらい：私たちのまちで、世界とのつながりを見つけ、共に生きるためのまちづくりについて考える。

- 学習のながれ**：①まちの現状(国際化)を知る②課題を把握する(外国の方との交流)③課題解決の方法を考える(ワークショップ)④自分たちができることを行う

E S Dの視点からの省察：地域の実態に応じた「世界とつながる」単元を開発し、継続への道筋をつけた。

(3) 「荒川の開発と私たちの暮らし」…実践③(略)

3 学校に根付かせるための方略～協働を促す多様なワークショップの実践

E S Dが学校や地域に広がる際には、一つの象徴的な実践が有効となる場合がある。そこで筆者は、実践①～③を学校公開と関連させたり、大学教員との授業検討会への参加を教員に呼び掛けたりすることで、情報公開に努めることにした。また、職員会議で資料を配布し、10分程度の説明を行うなど、E S Dへの理解を促す様々な手立てを講じた。しかし、総体として根付かせるためには、不十分であった。それらは全て、こちら側からの「一方通行」に過ぎなかったのである。

そこで筆者は、E S Dを学校の課題と関連させて、「双方向」のやりとりを通じて広めていくことに転換した。参加型のワークショップ研修や授業を行うことで、互いに意見を出し合い、議論し、共に創る体験を共有することができた。そして、学校・家庭・地域がつながり、協働する環境の土台をつくることができた。

以下の取り組みは、ワークショップの例である。

授業で行った例※K J法やロールプレイを用いた

- ①国語「話す・聞く」(校内研究授業)
 - ②総合的な学習の時間「もしも世界が百人の村だったら」
- #### 教員同士で行った例※次年度の計画作成へ向けて
- ③学校の良さを共有するワークショップ
 - ④総合の年間指導計画作成ワークショップ
- #### 学校・家庭・地域で行った例
- ⑤子どもを犯罪から守るワークショップ
(もともと地域主催で行われているものである。)
 - ⑥道徳地区公開講座ワークショップ

IV 考察

一年間の取り組みにより、E S Dの理念が反映されている3つの授業実践を行うことができた。また、次年度以降へ向けて、教員の手によって総合的な学習の時間を中心としたE S Dのカリキュラムを開発する兆しが見られるようになった。なぜ、「特別ではない」公立小学校で、このような変化が生まれたのであろうか。そこには、3つの要因(大切なこと)が考えられる。

一つ目は、「あるものを生かすこと」である。筆者は、これまでのカリキュラムを見直し、修正するように努めた。また、教職員の負担感が増幅しないように考慮し、新たな時間の設定や分掌・組織の追加はせず、学校公開や校内研究、教員の研修など、これまで行われてきたこととの関連を図り、効果的に機会を活用した。日々の教育活動を通して実践したということが、E S Dの素地が整えられた要因と考えられる。

二つ目は、「地域とつながること」である。E S Dを学校全体として実践するためには、管理職の理解と支援が不可欠である。まちづくりの実践が地域との連携を深めたことは、管理職の全面的な協力を得る大きな要因となった。

三つ目は、「協働して創ること」である。4つのワークショップによって、学校にかかわる人々が協働して創る体験を味わい、思いや願いを共有する契機となった。「一方通行」ではない「双方向」の活動が、現状を認識し、これからの学校・家庭・地域を考える上での大きな要因となった。

A校におけるE S Dの実践は、始まったばかりである。これまでの実践を継承しながらも、学校・家庭・地域が協働してカリキュラムを見直し、持続可能な未来を見据え、地域や社会の実態に応じて更新していくことを期待したい。

ⁱ 田中治彦『援助する前に考えよう』2006年、開発教育協会を参照。